

¡Hola amigos!

RとNの Málaga からの手紙

(018号)

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂く
うと思って開きました。 ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私
達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

2003年10月10日 R & N

目次	更新日
身辺雑記	2003年10月10日
買い物百般	2003年10月10日
エクスカーション	2003年10月10日

ご注意 : 各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。
悪しからず。

身辺雑記

「26文字の駅名」ノ巻 2003年10月10日 更新

最寄の電車駅の名前はベナルマデナ=アロヨ・デ・ラ・ミエルという長ったらしいものです。スペイン語表記は **Benalmádena-Arroyo de la Miel**、つなぎのハイフンまで数えると26文字になります。

世界で一番長い鉄道駅の名前はウェールズのどこかにあるそうですがソレが何文字かは知りません。でもこの駅名も相当なもんですよね。どうしてこんなことになったのか？ 私達の住居表示はベナルマデナで線路より海側ですが、線路の山側はアロヨ・デ・ラ・ミエル。詳しい線引きは知りませんが、線路か駅の付近が境目になっているようです。

両方の行政区が綱引きをした挙句、利用者の都合などお構いなし、両者の面子を立てて両方を並べたのでしょう。日本でも似たような例は有りますね。大会社が対等合併した場合などに良く見られることです。

私達はなるべく券売機を利用していますが、窓口でこの駅行きの切符を買う人はなんて言って買っているんでしょう。はっきり聞いた事はありませんが勿論フルネームを言って買う人はいないと思います。急いでいる時は舌でも噛むのがオチです。

私達自身はベナルマデナとしか言いません。それでちゃんと用は足るので多くの人がそうしてるのだと思います。それなら両方をつなげてこんな長ったらしい名前にした意味はほとんどありません。

いっそのこと両方に全く関係のない新しい名前を考えるか、両方の一部ずつをつなげてベナ・アロヨ **Bena-Arroyo** とか、ベナ・ミエル **Bena-Miel** とかにはできなかったのか。ゴロもいい、と思うんです、「上六」「紀文」でいきゃいいんです。

国鉄も両方のドンの鼻息をうかがうのではなく、利用者が言いやすい名前を考えて貰いたかったですねー。



ご覧のように夏の喧騒が終わってプラットフォームもすっかり人影が少なくなりました。短期滞在者用のアパルタメントは九月に入って、いつときは所々空室があったようでしたが、十月に入って又満室状態の事が多くなりました。多くは中年の客です。10月1日からは室料が大幅に安くなるのが主な理由でしょう。何しろ7~8月の65パーセント引き、9月の45パーセント引きですからバカになりません。しかも何処へ行ってもすいていて、快適です。バカ騒ぎをする若者も少なくなりました。私達も先日グラナダのアランブラ宮殿に行って来ましたが、3月に行った時とは全く違い、かなり静かな雰囲気で見物できました。この様子はまたいずれエクスカージョンの項で報告します。冬行けばもっと静かなアランブラが見れるのでしょうか。この安くてすいている時期をのがす手はありませんから、私達もこの機会にせいぜい出かけようと思っています。当面の狙いはカナリー諸島です。Rは現役のときラス・パルマスとサンタクルース・デ・テネリフェには数え切れぬほど入港しましたが、オカのニオイをかぎに行くぐらいの上陸で、ゆっくり見物した事は一度もありません。今度は海から陸をでなくオカから海を見たいと思っています。

* 買い物百般 *

「二代目買物カート」 2003年10月10日 更新

買物カートが具合悪くなってしまいました。丁度11ヶ月使った事になりますが、とにかく水物の買物が多いのでかなりの酷使だった事は確かです。特に夏場になってからは正真正銘の水ミネラルウォーターの消費が増えたので、それがこたえたのでしょ

う。今度はチョッと奮発してがっちりした頑丈なものを買いました。

写真のようなもので、二輪で引いてもヨシ、四輪にして押してもヨシです。袋をはずして段ボール箱やスーツケースを運ぶことも出来ます。些かバーサンくさいので初めは抵抗を感じましたが、車を持たない私達には必需品で、そんな事は言ってもらえないと悟りました。ここは坂の町ですから買物はもっぱら坂の上のほうにあるスーパーを中心に考えます。20キロを超える重量でも坂を降りてくるのは楽チンです。スーパーのデリバリー・サービスも有りますが、自分の足で歩けるうちはソレは使うまいと思っています。コレを引っ張ってヨタヨタしているのを想像されるのはちょっとシヤクですが、中身はビノ、セルベサ、ハモン・セラーノにチョリソなどなどデスゾー。



エクスカーション・既刊

「ガリシア」の巻・その五 2003年10月10日 更新

(五日目午前) ビーゴ (vigo)

今日の行く先、まず午前中はリアス・バハス最大の都市ビーゴです。そして午後はポンテベドラ県の県庁所在地ポンテベドラ **Pontevedra** に行きます。言わば今日は町巡りです。宿のあるカンバドスと両都市の位置関係、まずポンテベドラまでは前号4日目午前の地図をご覧ください。そしてポンテベドラとビーゴの関係は下図の通りです。ホテルからビーゴまではバスで小一時間、この旅行中走ったところは殆ど自動車専用道(**autovia**・赤線部分)ですが、特定の場所以外は全て通行料無料です。

右上が午後のポンテベドラ、下端中央がビーゴ。こんな入り江が無数に続きます。



ビーゴも文字通り天然の良港で、古くからスペイン有数の重要港湾の役割を果たしてきた港です。一般にはあまり知られていないかもしれませんが、日本向けの冷凍魚の

輸出港としてはグラン・カナリーのラス・パルマスと並んでスペインではトップの位置を保っていました。最近の食品の流通は変化が激しく只今現在もそうかどうか定かではありませんが、少なくともRが現役の頃はソウでした。一度、ここから日本向けの魚を積むという引き合いがあつて、海図を買い揃えたり入港針路の検討をしたりして準備したのに、その後取引は流れてがっかりしたことを憶えています。

下の写真はスペイン版、「港の見える丘公園」。ど真ん中のビルが邪魔して興をそぐので、これ以上いい場所へ移動する気をなくして投げやりに撮った一枚。ビルの陰になっているのは入港中の巨大な養老客船。チョウお金持ちの洋上移動養老院、らしい。それにしても、この辺の複雑に入り組んだ数知れぬ入り江を、一つ一つマイ・ボートで魚を釣りながら、アルバリーニョを呑みながら巡ったらどんなに楽しいだろうとつくづく思います。一夏はあつという間に過ぎるでしょう。

こんな超豪華な客船の一室を買い取る何分の一かで実現可能なユメなのに、天下のマワリモノも私達のとこだけは素通り、イヤ回っても来ません。



次は港の見える丘公園最上部にある、言うなれば城址公園。どの町へ行っても一番高いところには城アトか教会と決まったようなものです。その当時一番力があつたのは

このどちらかという事でしょう。ところが一般の住宅となるとスペインでは山の上には庶民階級、お金持ちは平地という図式が普通のようなのです。中南米諸国へ行くところの傾向は更にはっきりしています。もっとも最近では更にその上には再び豪邸ということが多いようでもあります。これは車が普及して道路の整備が進んだせいでしょう。

この城址がヨソのものとは一味違うのは、その石垣の組み方です。日本の城と同じように斜めになっています。この写真何も知らずに見れば日本の何処かの城址と見えなくもないでしょう？ 石垣の手入れは悪いですけどね。

私達がこれまでに見たスペインの城址は、どれもこれも垂直に切り立った石壁や煉瓦の壁が普通で、こんな形のものを見たことがありませんでした。

まわりの樹木の多さや種類もアンダルシアの城址ではあまり見かけないものです。とにかく、この界隈の色々な風物がことごとく日本の同じ季節に符合するのです。アンダルシアの乾ききった風景と押寄せる外国人観光客を見慣れた目にはとても新鮮に、且つ懐かしく映ります。



このアト、17世紀に建てられた侯爵の館パソ **pazo** をそっくり博物館にしたものへ連れていかれました。この館の最後の住人は20世紀初めの頃の駐英大使で英国暮ら

しが長く、英国人女性と結婚して、その後この館を大幅に改築したのだそうです。だから内装や調度品などにはイギリス貴族の館の影響が強く残っているらしいのですが、私達には何処がソウなのか見分けもつきません。ただアツケにとられるばかりです。建物の中は並の美術館など吹っ飛びそうな美術品のオンパレードで、最後の主人が使っていた当時の館を、細かな調度品もそのままの状態で見学に供しています。

そのかわりセキュリティーは極めて厳重で、内部は撮影禁止、持ち物は全て入り口のロッカーに保管され手ぶらでの入場です。そして館内の全ての場所を見張れるように大勢のガードマンがいたるところに配置されていました。

言うのもアホらしくなるくらい広大な庭園の中にある超豪邸で、いかに当時の貴族階級が贅沢三昧をしていたかという格好の見本でもあります。

日本でも古都へ、例えば金沢などへ行くと、旧大名家の所蔵品を納めた美術館や博物館はありますが、木や紙の文化と石の文化の落差でしょうか、どうも我が方はその密度または質の点で分が悪いように感じます。



博物館になっているパソ＝貴族の館。この左手前は広大な庭園。



博物館内部、撮影禁止ですからこれはRの撮ったものではありません。ホントに。



ビーゴの外海に面した浜 **playa**、日差しは強くても水は冷たく、さすがに泳ぐ人は少ない。トップレスも少ない。波打ち際を歩く人がエンエンと連なっていました。



サテこのアトはイヨイヨ自由時間、お楽しみタイム。なんだか小学校の修学旅行みたいにヒタスラ自由時間を待っているんです。要するにリーダーの言うことが理解できなければ、自分勝手に動ける時間が一番の楽しみです。考えてみれば小学校から今まで、ずーっと常にソウだったような気がします。勝手気ままが一番。

まず上の写真、コレ、何を売ってると思いますか？ 人がごった返す市場通りのような狭い通り、台の上に乗っているのは生牡蠣なんです。売り手のオバちゃんが次から次へと牡蠣の殻を開けて皿の上に一ダースずつ乗っけて売っているんです。売れようと売れまいとお構いなし、売れ残ったらどうするかなんてチマチマ考えていないみたいです。どんど剥いちゃってます。

今、真中のオッさんが一皿買っている所ですが、このアトどうするかというと、オバちゃんの後ろの方のバルの席がどこか空いていれば其処でもヨシ、でなければ反対側この写真の右手にはレストランがずらっと並んでいるので、その何処のテーブルにでも皿ごと持ち込めばいいんです。

私達もとりあえず一皿買って空席を探したんですがないのでウロウロしていたら、牡蠣剥きのオバちゃんにソコへ座れと対面のレスタウランテのテーブルを指差されてビックリしました。だって普通、レストランへ食べもの持参で行くなんてチョット二の足を踏みますよね。でも、この向い合わせの店はお互いに持ちつ持たれつ、生牡蠣の皿を持ってレストランのテーブルについて、そこでセルフサなりビノなり注文して座っていれば、自然とレストランへもほかの注文が出るだろうし、更に二皿目の牡蠣も売れるわけです。牡蠣の皿を持って座れば黙っていてもレモンも出してくれます。勿論ロハではありません。

私達もマンマと術中にはまりました。短い自由時間の間に、まず牡蠣とセルベサ、再び対面のオバちゃんから牡蠣を運んで今度はアルバリーニョ、更に今度はレスタウランテからまたまたプルポ・ガリエーゴとまたまたアルバリーニョ。結局自由時間は全てこの通りの向い合わせの店を行ったり来たりで終わってしまいました。

ビーゴだけに限らず、この辺の静かな海面には沢山の養殖イカダが浮かんでいます。

牡蠣をはじめ、ムール貝、帆立貝などのイカダです。



コレがこの牡蠣ですが、ご覧のように殆ど貝の形がまん丸です。こんな牡蠣何処でも見たことはありませんでした。西洋人、中でも生のシー・フードなんて「オー・ノー」であるアングロサクソンでさえ、なぜかオイスターだけは生でOKなんですね。

だから、イギリスを含め世界中あちこちで生牡蠣を食べましたが、こんな丸い牡蠣は知りません。しかも貝殻が平たいんです。そのわりに思いのほか肉厚です。

一つかぶりついて、ウーン。思わず写真を忘れそうになり、慌てて撮った一枚。牡蠣の向こうのレモンが見えると思いますが、コイツをむんずと掴んで牡蠣にしぼりかけて食べるんです。ムイ・ブエノ、estupendo, 言うことナシ。

(五日目午後) ポンテベドラ (Pontevedra)

ビーゴから一旦ホテルに戻り、昼食。なた豆のスープにロースト・ポークの煮込み。ロースト・ポークはセルド・アサド **cerdo asado** と言いますが、ソレを更に煮込み=コシード **cocido** にしてあるのでコレはナント言うのでしょうか。

最終的には煮込み料理なので、やはりセルド・コシードでいいのだと思います。なにせ、あてがいぶちでメニューもなく、いきなりドーンと出てくるのでその都度これはナンダと材料の詮索から始まります。スペインではヤギの肉を良く食べるし、ウサギも決して特別な食材ではないんです。スーパーや市場の肉売り場では皮を剥かれたウサギが丸のままゴロンとしています。私達も知らないうちにヤギやウサギを食べさせられていたのかも知れません。でも今日は間違いなく豚肉、セルド。

今日のメニュー、なた豆もセルドも申し分なかったんですが、生牡蠣とプルポ、セルベサにアルバリーニョ、から丸一時間立っていないので殆ど食欲ナシ。昨日と同じような結果になりました。でもビノだけはテーブルに出た瓶は全部空っぽ。

それにしてもスペイン人は良く食べる。彼らにとっては昼食が正餐なのでホテルの食事でも昼が一番重いものが出ます。私達は普段、昼は麺類ツルツルとかサラダにサンドウィッチ&ビールで軽いものが殆どなので、この旅行中は常にもたれ気味。いうまでもなく食べ過ぎです。食べてばかりです。ソウでなくてもこのHP食べる話が多いのにこの旅はとくに多いなあと我ながらあきれています。

昼食の後は勿論シェスタ。こういう生活を続けていけば中年以降、肥満にならざるを得ないでしょう。これはスペイン人だけでなくラテン系民族共通の問題でしょうが、シェスタの習慣に限ってはスペインが一番色濃く残っているようですね。

EUに統合されてからは、北の国と歩調を合わせるため、シェスタなんかしてられなくなるんじゃないか、と言われていましたがドーシテどうしてアンダルシアでは銀行をはじめ午後二時過ぎには町中シんでしまいます。まあ夏の昼下がりに冷房のない所でフーフー言って働くより、ヒルネでもした方がイイに決まっていますけどね。

17時出発で今度はポンテベドラ行き。

この町はポンテベドラ県では一番早く港として栄えたらしく、町はビーゴより小さいのに県庁はこっちに有ります。古い建造物もビーゴより多くあるらしく、観光案内所で貰ったパンフレットも建物の紹介が殆どでした。

この町でガイドネー・イサベルが連れて行ってくれたのは、尼さんの夢枕にマリア様がお立ちになり、なにやらありがたいお告げがあったと伝えられている建物でした。この手のオハナシにはあんまり関心のない私達は、自由時間を早く早くと思っていました。みんなも大同小異だったらしく、又、イサベル自身もソウだったのかこのアト町の中心の広場まで先導してアッサリ自由時間。

私達は例によって観光案内所にまっしぐら。そしてたっぷり一時間以上町歩きを楽しみました。皆さんも多分ソウだと思いますが、古い建造物、特にカテドラルのたぐいには些か食傷気味ですので、小さい写真でこれもアッサリ片付けます。



これらの建造物はいずれもキリスト教か行政府にかかわるもので、一つ一つ説明するのも、ソレを聞くのも退屈でしょうから、ご想像に任せます。テヌキです。



ここで少しビックリのハプニングがありました。バスの待っているところへ帰って来たのは私達が一番先で、集合には少し間があったのでカーニャでも一杯と近くのバルに入ったら、我がドライバー君もそこで一服していました。

時間になったのでバスに戻ったのですが、イサベルも含めみんなナカナカ帰ってきません。そのうちドライバーは携帯で誰か、多分イサベルと話していました。15分ほど遅れてヤットみんながそろいましたが、この旅行中こんな事はコレっきりでした。スペインでは全般に約束の時間はあてにならないと思っていましたが、この旅ではみんなキッチリ集合時間を守っていました。意外な一面を見たように感じました。

ホテルには30分ほどで着き、夕食まで少し間があったので海岸を散歩。夕食は茹でエビ、ムール貝のパスタ、ヒラメのムニエル。どれもなじみのあるものですが、味のほうはイマイチ。新鮮な旨い生もののアトでは仕方ありませんね。食後はいつもどうり外カフェ、静かなるバルマンもいつもどおり静かにブランデーを注いで夜はふけて行きます。夜のカンバドスは静寂そのもの。人通りも殆どありません。帰って来るとホテルの隣の飼い犬がシッポを振って迎えてくれました。このワン君毎日顔を合わせてイヌずきのNにすっかりなついてしまい、もう殆どウチのイヌ。
